

## 館長よりご挨拶

大阪市立科学館 館長 斎藤 吉彦

感染症の拡大がおさまらず、身近に罹患を聞くなど不安な毎日の中、筆を走らせています。本稿がみなさまの手元に届くころには、明るい世の中になっていることを願いながら。去年度もこのようなことを書きました、今年度こそ。

さて、本年度の目玉は何と言っても、2月にリニューアルしたプラネタリウム、高精細度の迫力ある映像で、宇宙旅行が楽しめるようになったことです。宇宙から地球を見た感動は人生観を変えられると言われてますが、まさにそのような体験ができるようになりました。操縦士は大阪市立科学館が誇る学芸員です。ぜひ、ご覧ください。

我が国の最初のプラネタリウムは、1937年、当館の前身である大阪市立電気科学館の設立時に導入され、半世紀を越えてプラネタリウム文化を築いてきました。当館は、1989年からその伝統を引き継ぎ、新たに学芸員制度を導入し、今日まで、調査研究に基づくプラネタリウム投影を続けてきました。新プラネタリウムで、戦前から鍛え上げてきた力を思う存分発揮しています。

さらに飛躍を企てています。北隣には大阪中之島美術館が2月に開館しました。直近には国立国際美術館が活躍しています。新プラネタリウムで、使命「科学を楽しむ文化の振興」に向かって邁進するのはもちろんですが、芸術的な方向にも道が開けました。サイエンス&アート文化にも挑戦しようと、職員一同、気合を入れています。企画展「色と形のふしぎ」(5月29日まで)はその事始めです。

感染症対策には万全を期しています。今年度も、こうご期待！



サイエンス&アートの発信地  
大阪市立科学館(左)、大阪中之島美術館(右奥の黒い建物)、  
国立国際美術館の玄関口(右側のステンレス製オブジェ)